御堂地域活用構想

１　目　的

現在、祢津御堂地域において、約 28ha のワイン用ぶどう団地の造成工事が進められており、団地の中には約 1ha の非農用地があります。「広大なヴィンヤードの景観を活かした、地域振興の拠点となるようなものの設置を」という地域の意向を踏まえ、この非農用地の利活用を軸とした御堂地域一帯の構想の策定を市民と協働で行うため、地域住民とのワークショップを開催し、その中での意見や要望を基に御堂地域活用構想を策定しました。

なお、策定は市と包括的連携に関する協定を締結している信州大学に委託しました。

市は、御堂地域活用構想に基づき、地域組織等が行う活性化に向けた取り組みを支援していきます。

２　御堂地域活用構想策定

（１）総説

御堂地域の活用については、住民からワイナリーの集積地として多くの人々が集うワイナリー村になることを願う声が寄せられている。ワイナリーとぶどう畑は、経営の観点からも隣接している。

特に、このような地域計画を策定するにあたっては、複合的な視点が不可欠である。たとえば、防災の専門家だけの観点を取り入れた地域計画では、環境に配慮した地域計画を策定することはできない。日本の環境計画の課題は、複合的な視点に欠けているところにある。個別の地域計画を立てていくと、資産価値が下がり、人口が減少して、ひいて維持費がかかる事態になりかねないのである。その意味では、御堂地区の地域計画も、ワインの活用だけでなく、景観、生物多様性、ツーリズム、住宅価値の保全等の複合的な視点による計画立案がなされることが望ましい。

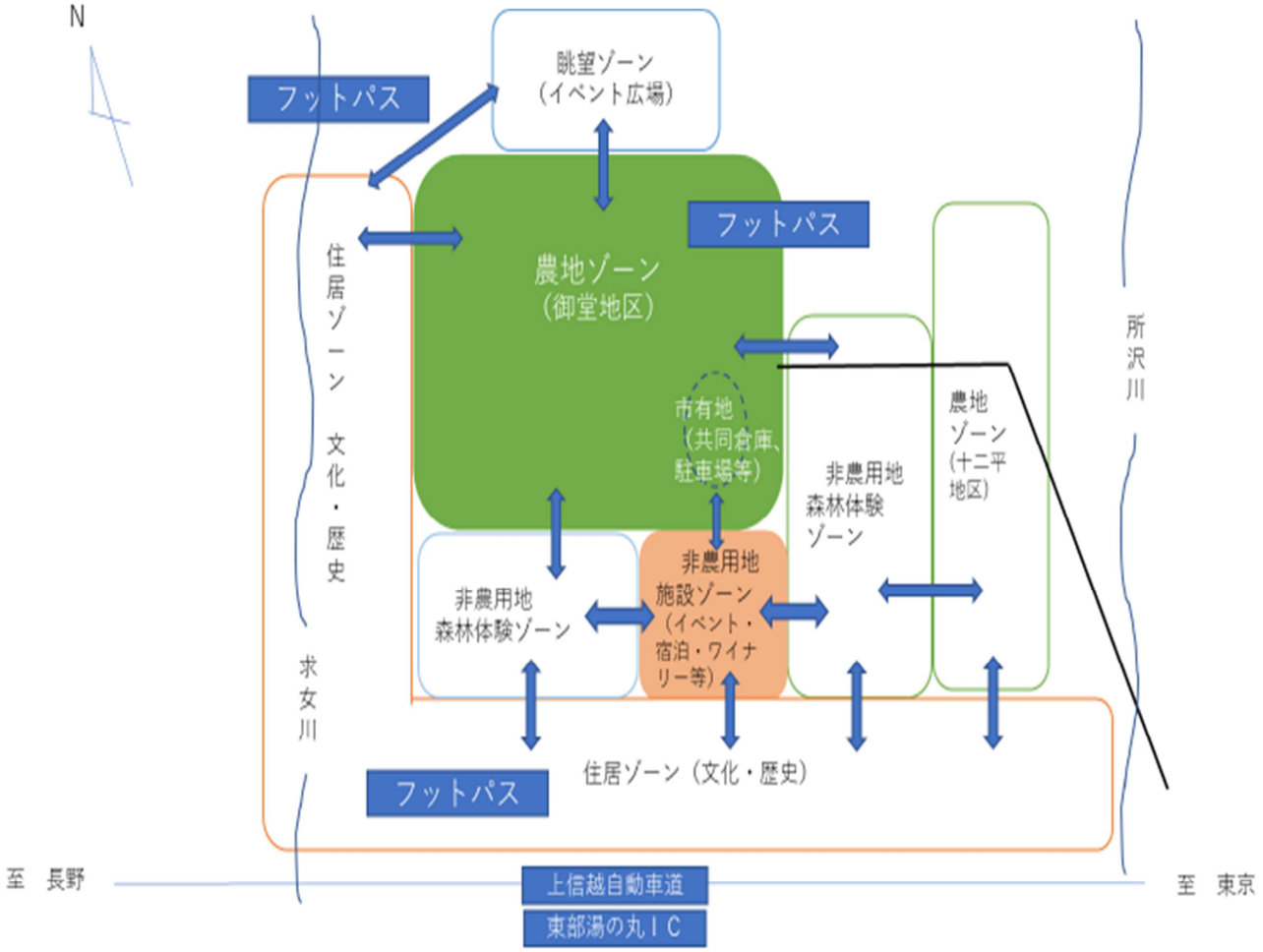
（２）提案の概要

信州大学社会基盤研究センターでは、4 回のワークショップを開催して、御堂地区を活用する構想を検討してきた。住民の合意形成、予算措置、開発の制約条件等があることに鑑みると、確定的な提案というよりも、複数選択的な提案をすることが住民による御堂地域活用にとって最も望ましいものと判断した。そこで、本提案では、ハード面、ソフト面に分けて、ありうる構想を複数提案することとする。行政においては、これらの提案を踏まえて、より広範囲の住民の合意形成を進めつつ、中長期的にみて、東御市の価値を高める構想を進めていくことが求められる。

① ハード面

御堂地域の活用は、今回開発される農地、非農地地域だけでなく、周辺地域も含めて考えていくことが求められる。そこで、ハード面について、大きく（ア）農地ゾーン、（イ）施設ゾーン、（ウ）体験ゾーン、（エ）眺望ゾーン、（オ）住居（文化・歴史）ゾーンにわけて、次の通り、活用構想を提案する。

なお、市所有地となる非農地エリアについては、公共性の高い施設が求められるところ、イベント会場、支援組織拠点、駐車場、農機具倉庫、総合案内、販売所などの要望があった。他のゾーンとあわせて総合的に判断していくことが求められよう。



（ア）農地ゾーン（御堂地区）

・効率化を念頭に置いた圃場を整備する。

・ウェザーステーション等、ワインの品質向上・作業の効率化、低コスト化のために欠かせないデータを収集するシステムの設置が必要。

・圃場にフットパスを設置して、訪れた人々が歩ける場所にする。

（イ）施設ゾーン

・ワイナリーの設立、オーベルジュの誘致。ソフト面でも示すとおり、ワイン単体では人は来ない。御堂地区のワインとマリアージュできる企業誘致が不可欠。

・結婚式等のイベントが開催できる会場を設置・管理できる企業の誘致。ソフト面でも示すとおり、ワイナリーに併設された結婚式会場は、世界に的に人気が高く、地域ブランドの観点からも、ブランドイメージ向上につながる。

・海外のワイン産地に見られるような地区の生産者が集まって試飲会を開催できるようなセンター。生産者だけではなく、ジャーナリスト、ソムリエ、一般消費者を対象にした試飲会、セミナーを開催して情報発信基地としての役割も果たせる。

・ワインに限定せずに同じく東御市の産物であるクルミ（クルミの加工品）をともに紹介するセンターとする。

例：オーストリアのシュタイヤーマルクにはそうしたセンターがある。ワインとパンプキンオイルの２つを紹介している。

（ウ）体験ゾーン

・農業体験をしつつ、農泊の活用。体験を伴う観光は、リピート率が高くなる。

・御堂地域に隣接している森林での森林体験。

・家族や子どもを対象としたアスレチックの設置。

（エ）眺望ゾーン

・フットパスにおいて、圃場や千曲川ワインバレー地域を眺望でき、ヴィンヤードを楽しみながら軽食を取ったり癒しの空間としてのゾーンを設置する。

・歩いて上がれない人のために、自動車などで上がれるコースになることが望ましい。

（オ）住居（文化・歴史）ゾーン（御堂地区周辺）

・フットパスにおいて、文化財や歴史に触れるコースを作り、滞在型ツーリズムの拠点となるような農泊・民泊施設も必要である。

・ここに住みたいという生活圏を作る。

② ソフト面

（ア）東御市（御堂）ブランドを確立する

・品質の向上を図る仕組みが必要である。

・地域特性をデータにもとづいて作出していく作業が必要である。

→データ収集・分析、そしてその研究が不可欠（信州大学経法学部ワイン分析室との連携）

（イ）観光客を呼び込む　―　来たい地域を目指そう

・ワイン単体では人は来ない。食や体験と組み合わせてツーリズムを組む。

・ぶどう栽培に地域外のボランティアを呼ぶ。苗木の植樹を手伝ってもらう。その畑は「自分の畑」、そこから作られたワインは「自分のワイン」に。

・ワインと合う土地の食を開発する。たとえば、クルミ料理や、クルミの殻で育った地鶏、クルミペースト、クルミオイルなど。

・記念となるイベントを開催する。歌舞伎舞台など祢津地域には歴史的建造物が多数あるので、地域の四季折々の祭事等との連携を図り、観光地としての魅力の向上を目指す。圃場に併設された結婚式場は、世界的に予約が殺到。全天候型のオープンエアのイベント会場を作ることは効果的。

・住民によるフットパスの活用。そしてその成果を世界、全国への発信。

（健康データを収集して、成果を科学的に分析することも効果的）

（ウ）自立運営可能な支援組織を作る

・栽培から販売までを支援する組織が必要。

・支援組織は農機具の貸し出し、データ収集のためのインフラ整備、データに基づく栽培指導、ワインの販売発信、地域特性分析の委託業務等を行う。

・支援組織の財源は、支援組織自らワイナリー等を経営するほか、ワインの販売益の一定割合の拠出、ふるさと納税の活用など。

③ フットパスを通じたまちづくり（まとめ）

イギリスでは、だれでも歩いてよい道、フットパスがいたるところにある。住民や観光客は、いつでもこのフットパスをウォーキングできるようになっているのである。

イギリスおける田園地帯におけるウォーキングの経済的価値と社会的価値に関して、次のような研究がある。

イギリス田園地帯のウォーキングに関する資源は、18 万 8000km 以上の直線ルート、3 万 3600km 以上の長い距離の小径、多くの短めな地域内での小径がある。ここに、5 億 2700 万人(2003 年のイギリスの人口 5955 万人)の、年に 1 回はイギリス田園地帯にウォーキングのために旅行に来る人々がいる。

この旅行と結びつく消費額は地域あたり 61 億 4 千万ユーロである。この消費から得られる収入は、1 兆 4730 億～2 兆 7630 億ユーロとなる（この収入は 18 万 559(人)～24 万 5,560(人)に相当する正社員の仕事に相当する）。既存の小径の維持費用は、およそ 6920 万ユーロ、1 年あたりの維持費は 1855 万ユーロであり、ウォーキングから得られる総合的な利益は、修復や維持にかかるコストを大きく上回る。

世界にはフットパスガイドという本も発売されており、フットパスガイドに掲載されると、上記のような観光客層を呼び込むことが大きく期待できる。

以上のことに加えて、参加者からは比較的歩きやすくそこから東御市特有の眺めも期待できるルートになっていると評価が得られた。その一方でルートの維持管理に関して質問がなされた。英国における例を参考に日頃から住民が利用していれば歩くこと自体が踏圧によるルート管理につながること、1 年に 1 回（夏、冬）、1 年に 2 回(夏、冬)などの草刈り管理の影響をモニタリングすることで例えば 1 年冬 1 回などの粗放管理でどれくらいの植生に維持できるのかを検証し、手間をかけずに維持できる可能性を紹介した。また、集落内部の歴史的な資産を繋げるルートについては実際の英国の事例が紹介され、車道と分離した安全なルートの確保、集落、寺院、田畑、林などの多様な土地利用を縫うような計画の重要性が共有された。住民の健康の利益を考えると、歩ける街－フットパス構想は、今後の地域計画において最も注目されるべき計画といえよう。東御市において、歴史×文化×食×眺望×ワインを結ぶフットパス（別添）を提案する。

④ 地域住民向けワークショップ開催の概要

4回にわたり、御堂地域の活用についてワークショップを開催した。その概要は以下のとおりである。

第1回　2017年11月30日
○報告者：㈱リュードヴァン　小山　英明　氏
○場　所：東御市中央公民館学習室5
○時　間：14：00～16：00
○内　容：御堂地域でのワイン生産のあり方について

第2回　2017年12月10日
○報告者：ソムリエ　大越　基裕　氏
○場　所：東御市中央公民館講堂
○時　間：14：00～16：30
○内　容：世界の最新ワイン事情について

第3回　2017年12月14日
○報告者：信州大学社会基盤研究センター准教授　上原三知　氏
○場　所：東御市中央公民館学習室5
○時　間：13：00～15：00
○内　容：フットパスによる地域活性化について

第4回　2018年1月18日
○報告者：信州大学社会基盤研究センター准教授　林靖人　氏
○場　所：東御市役所2階全員協議会室
○時　間：14：00～17：00
○内　容：ワインのブランド戦略について

報告会　2018年3月28日
○報告者：信州大学社会基盤研究センター准教授　上原三知　氏
○場　所：東御市中央公民館講義室
○時　間：15：00～17：00
○内　容：御堂地域活用構想の報告について

※出典：国土地理院ウェブサイト
3Dデータをもとに NPO法人KAACが作成

フットパスとは…

誰もが歩ける利用権が承認され地図に明記されたルート。
周遊でき、街、農地、森林など地域の特徴を感じられることが望ましい。※イギリス発祥。

当該地図のルートは、ワークショップにて意見が出た見どころとなる地点を結び、英国のフットパスの典型的なモデルに似たスケールでルート設定をしたものである。

1周約9kmで、徒歩でおよそ3時間半のコース。途中で黄色のルートを選択するコースの場合、約1時間半のコースとなる。